クリスマス伝説

3びきめのひつじ

再話 ひろのみずえ
絵 広野多珂子

クリスマス伝説

3びきめのひつじ

再話 ひろのみずえ　絵 広野多珂子

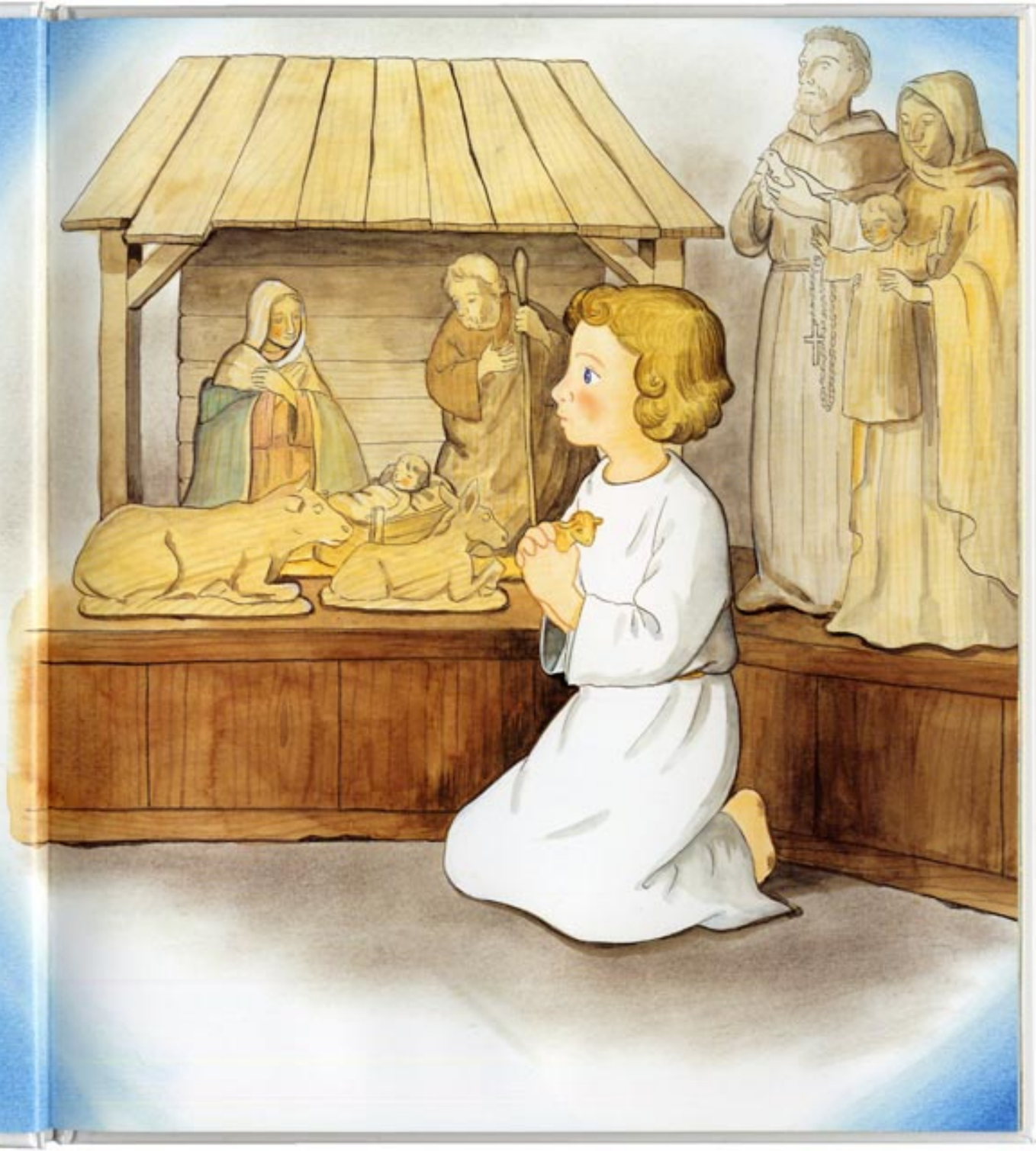
女子パウロ会

むかし、アルプスの　ファルスの　むらには、
たくさんの　きぼりしょくにんが　くらしていました。
なかでも　ドリッテは、むらで　いちばんの
きぼりしょくにんでした。
とおい　まちの　ひとたちが、うまに　のって、
せいじんのぞうを　たのみに　やってきます。

ドリッテが　ほった　せいじんのぞうは、あちこちの
きょうかいに　おかれました。
でも、ドリッテも、ほかの　きぼりしょくにんたちも、
マリアさまや　せいじんのぞう　いがいの　ものは、
けっして　ほろうとは　しませんでした。

くにじゅうの　さくもつが　みのらない　としが　ありました。
せいじんのぞうの　ちゅうもんも　こなくなってしまいました。
むらの　いえいえからは、パンを　ほしがって　なく　こどもの
こえが　きこえてきます。
ドリッテに　おくさんの　ベアタが　いいました。
「ねえ、ドリッテ。かわいそうな　こどもたちの　ために、
おもちゃを　ほってあげては　いけないかしら？」
「かみさまが　わたしに　きを　ほることを　おしえてくださったのは、
かみさまを　ほめたたえる　ためなんだよ。
それなのに、ほかの　ものを　ほることなど
どうして　できるだろうか」

しごとばに　はいった　ドリッテは、おやっと　おもいました。
へやの　すみで、なにかが　うごいています。
おとこのこでした。
すくいぬしイエスさまが　おうまれになった　ところを　ほった
クリスマスの　うまごやで　あそんでいます。
きれいな　こです。むらの　こどもでは　ありません。
「ぼうや、さわらないでくれ！」
ところが、おとこのこは、きぼりの　ひつじを　だきしめました。
「おじさん、これ　ぼくに　ちょうだい。
ぼく、ひとつも　おもちゃを　もっていないんだ」
ドリッテは　おとこのこが　かわいそうに　なりました。
「よし、ぼうやには、あたまの　うごく　ひつじを　ほってあげよう」
「ほんとう？」
「あした、とりに　おいで。ぼうやの　うちは　どこだい？」
「あっちだよ。おかあさんと　いっしょに　いるの」
おとこのこは、うえの　ほうを　ゆびさしました。



つぎの　ひの　おひるに、ひつじは　できあがりました。
（うりものではなくて、おくりものなのだから、
かみさまも　ゆるしてくださるだろう）

「のこりものを　わけてください」と　こえが　して、
みすぼらしい　おんなのこが　はいってきました。
おぶった　あかんぼうが、きゃっきゃっと　わらって
ひつじに　てを　のばしています。
「だめだよ。これは、ほかのこに　あげる　ものだから」
ところが、あかんぼうは　ひがついたように
なきだしました。

「どうしよう。このこは、その　ひつじが
ほしいのよ。このこが　なきやまないと、
とうちゃんに　ものを　なげられるわ」
「もっておいき。ものを　なげられないで
すむなら」

ゆうがた。ドリッテは、2ひきめの　ひつじを　ほりあげました。
しあげを　していると、むらの　こどもたちが　はいってきました。
「こんにちは、ドリッテおじさん。なにを　ほっているの？」
「ひつじだ！　いいなあ。ぼくも　ほしいな」
「ぼくも。ぼくも　ほしい！」
「わかったよ。きみたちにも、すきな　ものを　ほってあげよう」
「ろばを　つくって。みみを　うごかせるの！」
「はねの　うごく　にわとりがいい！」
「これは、いそがしく　なりそうだ。ところで、きみは
なにが　ほしいんだい？」
ドリッテは、だまっている　ドリノに
こえを　かけました。

ドリノの　おとうさんと　おかあさんは、なだれに　あって、
なくなったばかりです。
「ぼくは　あした、とおくに　いる　おじさんの
ところに　あずけられることに　なっているんだ。
だから　いますぐ　この　ひつじが　ほしいな」
「わかったよ。もっておいき、ドリノ。
あのこを　がっかりさせてしまうけど。
あしたまでには、もう1ぴき　つくるさ」